
Brav gemacht !

Sturudel

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Brav gemacht !

【Nコード】

N1716K

【作者名】

Sturudel

【あらすじ】

ドイツに留学して、様々なことに出会い、この国が実はトンデモナイ国だということに気付く。はっきりに言って、おもしるすぎた。笑いもあり、涙もあり、恋愛もちよこつとありのエッセイです。

Ends (前書き)

退屈しのぎにはなると思います。

一度はさくつと読んでみてください。

すべてがフィクションではないところとところが面白いです。

人生で一度、留学なるものをする事になった。

キツカケなんぞは実に簡単だ。

要するに“現実逃避したい”とか“世界不思議発見に魅せられた”とかそんなもんだ。

いまだき明治の人間みたいに“国家存亡の危機を乗り越えるため”とか、あるいは超一流のエリート家系に生まれた生粋のエリートみたいに“世界に通用する能力を養うため”とか、そんなことは考えなかった。

ただ、マンネリが嫌だっただけだ。

超平凡な家庭で生まれ育ち、頭も普通、運動能力は微妙によくない、容姿は典型的な日本人、しかし身長だけはわりと古風に153センチと控え目。

そんな私は両親を拝み倒し、なんとか一年間だけ留学させてもらう事になった。

いろいろと考えて、将来を見据えた視野で考えた結果、ドイツのシンデレラ城のモデルになった城が見れる国に決めた。

行き先はドイツ。

ビールとソーセージの国だった。

出発当日、成田空港は素晴らしい天気で台風が直撃していた。

9月だけ、台風の季節だけ、ヒヤヒヤヒヤ！

普段の私なら学校が臨時休校になるから飛び上がって小躍りするところだったが、あいにくそんな気分にはなれなかった。飛行機が飛べるかどうかもわからなくなってきたからだ。

私のほかに、ドイツに留学する子は数人いた。

さすがに英語圏以外に行こうというトンデモ学生ばかりの精鋭ぞろいで実にユニークな輩が揃っている。私は心の中で密かに自分の平凡さを申し訳なく思っていた。

やたらとテンションの高い関西娘、バイオリンが得意なお嬢様、人とのコミュニケーションを一切拒絶する不思議な少年、194センチという長身と鬼太郎愛用のゲタを装備している少年、その他に数人いたがあまりインパクトがないので興味もわずに放っておいた。まあ別にそれで困ることはないだろう。

飛行機が無事に離陸できるので、両親とはここでサヨナラだ。自分で言うのもなんだが、年頃の娘というのは薄情なもので、自分はずたこらと行ってしまふ。涙を流して見送る両親のことなどすでに頭にはない。他のドイツに向かう子たちとドイツでの恋愛について盛り上がるので頭がイッパイなのだ。

そして飛行機はドイツに向けて飛び立った。落ちるかなーとは微塵も思わなかった。

私の輝かしい未来にそんなことはアリエナイからだ。

9時間の死闘を乗り越え、フランクフルト空港にたどり着いた私たちは、とりあえずユーゲントホテルという安い宿に泊まることにな

った。旅の疲れをちよつと癒しましょう、ってなわけだ。

そこには世界各国から私たちと同じように留学するためにやってきた子たちがいた。みんなそれぞれが期待に胸を輝かせて友達と話している。私も他の日本人の子たちも気持ちは同じだった。部屋に着くまでは。

「なにこれ、狭っ」

なんと6畳くらいの部屋に、ちよつと動く地震度6強の揺れが起こる二段ベッドが四つ。それだけ。何もなし。そんなところに8人も入るのだ。人口密度が高すぎる。

しかしそこは柔軟性の高い若者なので、すぐにおしゃべりをして楽しんだ。時間的には3時くらいで夕方までは自由なので余裕もある。不満と言えば、このホテルから出られないことぐらいか。しかし、それはあまり気にならなかった。疲れていたからだ。私や友達はホテルのバルコニーで外の風景を眺めた。日本とはまったく違う風景。改めて遠いところに来たんだなーと実感する。それは嬉しかったし、どこかさびしかった。

夕方になって早めの夕食が用意された。
ビュッフェスタイルだったのだが、はつきり言わせてもらう。

総合的にどれもとんでもなくまずい。

溺死したパスタ、いかにもインスタントな薄っぺらい味のミートソースっぽいソース、ポカリを極限にまで薄めたなんだか怪しい感じの飲み物。手抜きが生きがいの母でさえ、このような悲惨な食事を用意することはなかった。というか、ビュッフェなのに選択肢がないというのもミソである。

疲れた体には辛すぎた。私はけっきょく半分も食べられないまま夕

食を終えた。

これはもうお風呂に入るしかないと考えた私は、友達を誘ってバスルームに向かうことにした。安ホテルなので部屋にはなく、共同のシャワー室を使うのだ。

途中、何度も何度も何度もナンパされた。ラテン系の男というのは実にタチが悪い生き物で、ダメだと言ってるのに強引に押してくる。

「お酒飲まないかい？」

と。こっちはね、疲れとるのだ。君たちとは違ってタフではないのだ。

ついに横の友達がキレた。日本語で怒鳴るというのは外人には実は驚異であったりする。

妨害を乗り越え、ようやく着いたバスルームに私たちは愕然とするしかなかった。

こ、これは……！！

そこには数個のシャワーと、おざなりな防水カーテンしかなかった。要するに公共プールとかのシャワールームである。脱衣所などという良心的なものはない。ついでに洋服を入れるかごすらない。

ここでどうやって脱げというのか？

びちゃびちゃにするしかないのだろうか？

防水カーテンの花柄を見て、なんだかおばあちゃんの家を思い出して切なくなった。

私たちはけつきよく頭くっさ！な状態で寝た。すでに全身から老廃物が出まくっているのがわかるのだが、あのシャワールームを使いたくなかった。

こうして夜は更けていった。

深夜、イタリア野郎たちが酒瓶もって乱入してきたのだが、そこは正義的に始末した。
安眠を妨げる者は死あるのみである。
ちなみに鍵なんていう近代的な文明の利器はなかったという事も、加えて追記しておこう。

次の日の朝、ついに私の本格的なドイツでの生活が始まることになった。

まず最初のファーストミッションは「無事にホストファミリーと合流すること」である。

なんだ簡単じゃん。と思つてはいけない。

私のホストファミリーが住むのは東ドイツの最果て。西ドイツのフランクフルトからそこへ向かうということがどれだけ大変なのか、それは強いて言うのなら鹿児島から北海道に行くようなものである。それも電車で。しかも一人で。

ドイツ語はさっぱり、英語は中学受験レベルに到達してるかわからんきわどいレベル、そんな私が右も左もわからんままだつやって行くのか。

しかし悩んでいても仕方がない。かくして、私は仲間たちと別れを告げ、旅だったのだった。ちなみに日本人の仲間たちはホストファミリーがみんな西ドイツで近かったので、すぐに合流してそれぞれ向かって行った。この時点で私の留学生活は最初から波瀾万丈だったのだ。

はつきり言わせてもらおう。ドイツ鉄道（DB）は乗らないほうがいい。

日本で言うJRなのだが、その運行状況はJRよりひどい。

まず留学スタッフにあらかじめ教えられたとおりのプラットフォームで待っていたのだが、電車が来ない。本当に来ない。ちっとも来ない。

しばらくの間、アホのように待ち、ようやく来たと思つた電車に乗ったら偶然に同じ留学生に出会った。彼女はアメリカ出身で、彼女

も同様にホストファミリーのところに向かう途中だった。

「ねえ、どこ行くの？」

そんなお決まりの会話をなけなしの英語でしていくうちに、はたと気づく。

この電車、間違っただけかい？

彼女の言っている行き先が違い過ぎた。しかも彼女にまで「違うね」と言われた。

「その電車はあっちのホームだよ」

そう言われて外を見ると、なんと発車寸前の電車があるではないか！私は大急ぎで電車から降り、彼女に別れを告げて駆け込み乗車を試みた。

なんとかぎりぎりセーフ。危うく鹿児島から沖縄に行くところだった。

私はほっと胸をなでおろした。

あとで知ることになるのだが、DBは気まぐれでしょっちゅうプラットフォームを变えるのであらかじめ調べておいてもあまり意味がないのだ。

そして揺られることなんと9時間！

これではフライト時間ではないか！！

そして目的地に着いたのは夕方。

いよいよ次の駅でホストファミリーと落ち合うことになっていた駅である。

この時点で期待は高まる。素晴らしいホストファミリーと出会えることを祈るばかりだ。

そして駅が見えてきた。なんとホストファミリーがプラットフォームで大きなウェルカムカードを掲げて待っていてくれた。

私のホストファミリーはパパとママ、そして三人の兄弟。とても賑やかで明るい素敵な家族だった。

これから私の生活が始まる。

一人ずつ自己紹介していった私だったが、次男坊に英語で「頭くっさ!」と言われた。

前途多難だ。

V i e r

輝かしいドイツ生活が本格的に始まった。早くも私は致命的な自身の欠陥に気づき、絶望の淵にたたずんでいた。

なんとということでしょう！

自転車に乗ると足が短すぎて地に足がつかません！！

ドイツ人の平均身長は高い。男性は180センチ、女性は170センチである。そして私のところにいるのは全員男、しかも上から20、18、16とまあ立派な青年なわけで、そんな彼らの自転車に乗るのは無理でした。

しかしドイツではみんな自転車。どこ行くのも自転車。ドイツでは自転車なしには生きていけません。さんざん練習しましたが、全身に打撲を負っただけでした。

困ったホストパパは妙案を思い付きました。

なんとということでしょう！

私に貸し出された自転車は長男が6歳の時に使っていたものだったのです！！

しかし私にはぴったりでした。家族は喜び、私一人心中で泣きました。

ところで、もうひとつ私を悩ませたものがあります。

ドイツの食事は死んでいる。

まさに北斗の拳のケンシロウの如き名言です。

ドイツの食事は *Kalt Essen* といって、要するに冷たいパンに冷たいチーズとハムをのつけて食べるというのが一般家庭の常識です。

しかし、このパンがまずい。

これがやたらとすっぱく、ぱさつき、まるで一週間机の中に放置した給食のコツパンを食べたような味がします。これはたまったもんじゃありません。ご飯が食べたくなること請け合いです。

とにかく最初のころはこの味に慣れるのが大変でした。

しかし人間というのは素晴らしく順応性のある生き物で、しばらく食べているとこんな世紀末のような味でもうまいと思えるようになります。世の中とはそんなものです。

そして最後にもう一つ、シャワーのことです。

ドイツではお風呂はありません。ある家庭もありますが、使うことは滅多にありません。水道代が高いからです。基本的にシャワーも一日一回浴びるか、浴びないかといった感じなのですが私はお水が豊富な国からやってきたので一日二回使わせてもらうことになりました。

しかし、このシャワー。日本とは勝手が違います。

まずお湯の出し方が違います。これを知らないと私のように寒いのに冷水を浴びることになります。これはシャワーの元栓の部分に輪っかのようなものがついていてるので、それを上にあげましょう。くいと。あれはいかにもシャワー業者のミスだと思いがちですが、そうではなくこういった重要な役割を担っているのです。

バスタオルは毎日替えるのはあきらめましょう。せいぜい一週間に一度です。洗濯機に放り込むのは個人の自由ですが、手もとに返ってくるのは一ヶ月後です。これはほかの洋服にも言えることなのでストックは持っておきましょう。

さらに頭上にクモの巣が張ってあることが多いのですが、放っておきましょう。取っても次の日にはすぐに再生します。たまにクモ本体がぼてつと落ちてくることありますが、冷静な対応をとるように心掛けましょう。私のように素っ裸にタオル一枚でホストパパのところを駆けこむのは危険です。

このように最初からこんなことで異文化の洗礼を受けるとは思ってもみなかった私なのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1716k/>

Brav gemacht !

2010年10月8日13時37分発行